

Title	リプライ
Sub Title	
Author	千川, 剛史(Hoshikawa, Tsuyoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.88- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評リプライ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

か、という問題に議論は立ち返っていくと思う。そうすると例えば、コンピューター・リテラシーの問題も含めた形で「言語的社会化」と「政治的社会化」のあり方を検討し直すことも必要になる。そして、そういうところに視点を移してみると、そうそう明るい展望ばかりも描けないように僕には思えるのだがどうだろうか。

(すずき ともゆき 法政大学社会学部)

リプライ

千川 剛史

鈴木智之氏の書評における私の論文への3つの「違和感」についてお答えしようと思う。

まず、(1)「どれだけネットワークが発達しても、それを利用する側が合理的な判断能力と政治的な文化を備えていなければ公共性のメディアとはなりえない」という指摘は、その通りである。

例えば、NGO／NPO独自の地球規模のコンピューター・ネットワークであるAPC (Association for Progressive Communication: 進歩的コミュニケーション協会) ネットワークは、環境・人権・平和といった問題に対して「地球規模で考え、地域に根づいた行動をする」という政治的な文化と、それを達成するための合理的な判断力を備えたNGO／NPOのメンバーが利用することで、地球規模の一種の「市民的公共性」を作り上げていると言えるであろう。

次に、(2)の「思考の道具としてのコンピューターは、政治的で批判的な理性を培養するようなメディアとなっていくだろうか」という疑問は、コンピューターをコミュニケーションの道具でなく、「思考の道具」として位置づけている点でいささかの外れな指摘である。

そこで、この指摘をコンピューター・ネットワークによるコミュニケーション様式の変化に関するものとしてとらえるならば、コンピューター・ネットワークの利用によって「いつでも、どこでも、誰とでも」コミュニケーションを行うことが可能となるが、他方で、こうした形のコミュニケーションは、その流れが分散したり、途切れたりする傾向があり、鈴木氏が指摘しているように「ひとつの問題をじっくり考え」議論するのには、不向きな性質がある。

そこで、議論が円滑に進み収斂していくような工夫が必要となるが、そのやり方は、現在、試行錯誤しながら考え出されている段階である。

(3)の「この(コンピューター・ネットワークという)メディアへのアクセシビリティはかなり不均等な形で配分されるだろう」という「情報格差」に関する指摘について。この問題を解決するには、コンピューターがもっと使い勝手の良いものとなり、また、コン

ピューター・リテラシーの育成を公教育の中で積極的に行っていく必要がある。

最後に、今日の日本において、阪神・淡路大震災でのボランティアの活躍が示しているように、社会の中の問題を自分の問題として受けとめ取り組んでいこうとする「市民文化」が若者を中心として形成されつつある。また、そのような若い「市民」たちは、新しいメディアに対する適応性も高い。したがって、彼らが、コンピューター・リテラシーを身につけてコンピューター・ネットワークを使いこなし、「市民的公共性」を築き上げていく可能性は大いに期待できるのではないだろうか。

(ほしかわ つよし 徳島大学総合科学部)